

音 楽 科

1 育成したい「思考力」

- a 楽曲や音のもたらす気分や内容から，表す情景を想像したり，特徴付けている要素を感じ取ったりする力
- b 感じ取ったことを基にして自ら創意工夫し，より豊かな音楽活動の方法を求めていこうとする力

音楽科における「思考力」は，楽曲や音を通して感じ取ったことを基にして，より豊かな音楽活動へと高めていこうとする力であると捉える。感受することが音楽活動の出発点となり，このことを基にして，表現するための工夫や，鑑賞の工夫へと展開していく力である。

この「思考力」の観点は，音楽科の特性を考慮し，「音楽的な感受や表現の工夫」ということばで表されている。表現領域のみならず鑑賞領域においても，音楽を感じ取る活動として「音楽的な感受の工夫」が大切となる。感受したことを基にして，聴く観点を明確にしながらか鑑賞の仕方を工夫するところにも思考は働くのである。

a 「感受」する力とは

楽曲や音から音楽的な要素や歌詞の構成を基に，その背景にある情景や心情といった具体的な像を描く力であり，音楽的な要素に着目して聴いたり感じ取ったりする力であると考えられる。

b 「創意工夫」する力とは

より豊かな音楽活動を求めて，創意工夫する際に働く思考は，以下の2通りが考えられる。

歌詞と音楽的要素との関連によって曲想を捉え，表現する

例えば「とんび」を歌唱表現する場合，3フレーズ目のとんびの鳴き声「ピンヨロー」の歌い方について歌詞と旋律，速度などの音楽的要素からイメージを膨らませる。そして，「音程が高い低い，高い低いと変化しているので，二羽のとんびが話している感じで強弱を工夫して歌おう。」「だんだん山の向こう側へ飛んで行くように，だんだん弱く歌いたい。」等，4回の鳴き声をどのように歌うか，場面を想像しながら，それによって歌い方を工夫していく。また，自分がとんびになったつもりで歌ったり，下からとんびを見上げているイメージで歌ったりする等，歌詞や音楽的要素との関連からイメージした情景を表現に生かそうとする際に，より創意工夫する思考が働く。

創作した表現を聴き合い，さらに創意工夫する場合へ

例えば「太鼓のリズムをつくろう」という題材では，やぐら太鼓や締め太鼓，たる太鼓を使ったリズムアンサンブルを行った場合，それぞれの音色や打ち方に合ったリズム創作を行い，曲の入るタイミングや強弱の工夫，拍や速さ等，表現を取り巻くその他の要素に対して工夫していこうとする力が必要となる。また，創作した表現を聴き合うことで，観点や学び方の違いを交流することができ，さらによい表現へと工夫するところに思考が働く。

2 「思考力」を育成する単元編成

(1) 「関心・意欲・態度」と音楽的要素の位置付け(単元内)

単元展開においては，まず感受が深まっていくための価値ある題材や楽曲に出合わせる事が重要になる。価値ある楽曲とは，特徴付けている音楽的要素が明確であり，子どもたちが取

り組みやすく、また取り組みを進めるにしたがって、深い味わいや活動の達成感が増してくるような曲のことである。そして教師は、子どもたちが知らず知らずのうちに音楽活動に夢中になるような教材を展開することが大切である。

教材の生かし方には二つの方法が考えられる。一つは、子どもが題材や楽曲に出合って、目や耳に触れ、楽しく表現活動をした後その楽曲の音楽的要素や曲想について知り、魅力ある楽曲について深く理解する方法である。低学年の子どもたちは、歌ったり曲に合わせて身体表現したりすることに意欲的で、活動に浸る場面から、その楽曲のリズムや速度などの音楽的要素に気付き、さらにより表現へと展開することが多い。

また、もう一つは、はじめに諸要素について知り、その後それらが含まれている多様な楽曲を調べたり比べたりして、様々な楽曲の魅力を味わうという方法である。これは、比較的中学年から高学年の子どもたちに多い場面として考えられる。例えば、日本のふしは5音音階であることを学習した子どもたちが、同じ5音でも、陽音階や陰音階、または沖縄音階と違った感じのするふしを聴き比べたり、実際に自分たちでそれらのふしをつくったりしながら、日本のふしの魅力やすばらしさを感じ取っていく。

子どもたちが題材や楽曲を通して得た興味や関心を出発点として、より豊かな音楽表現にするために歌詞や音楽的要素に着目しながら感受を深め、創造的な音楽活動へと展開していく。

(2)「表現形態」と「歌詞の内容」の系統性(学年間)

表現形態における系統性

低学年の子どもたちは、何かうれしいことがあって気分的に楽しくなると、自ら体を動かして踊ったり好きなふしを口ずさんだりして、嬉しさや楽しさを表現する。このような自己を表現する意欲や行動は、これから先の自主的で主体的な学習をする素地となる。音楽活動においては、リズムに対する感受は豊かなものがあり、リズムにのって自由に反応したり、リズムを体全体で表現したりする。したがって、一人でリズム表現に充分浸る活動を重視し、音楽の楽しさをのびのびと経験できるようにすることが音楽的感覚の芽生えとなる。

また、中学年の子どもたちは心身の発達に伴って知識に対する意欲も増してくる。さらに遊びや生活の面で自己中心的であったことから少しずつ社会性も発達し、学習面においても、少人数でグループを構成して活動することができるようになる。そして、小アンサンブル活動における簡単な重奏や合奏、合唱等に対しても、より豊かな表現に向けて意識が働くようになる。例えば、3年生では「小さな世界」をただ旋律のみを歌うだけにはとどまらず、前半部と後半部と一緒に合わせて歌う活動(パートナーソング)を通して、ふしを重ねることのおもしろさを味わうことができるだろう。

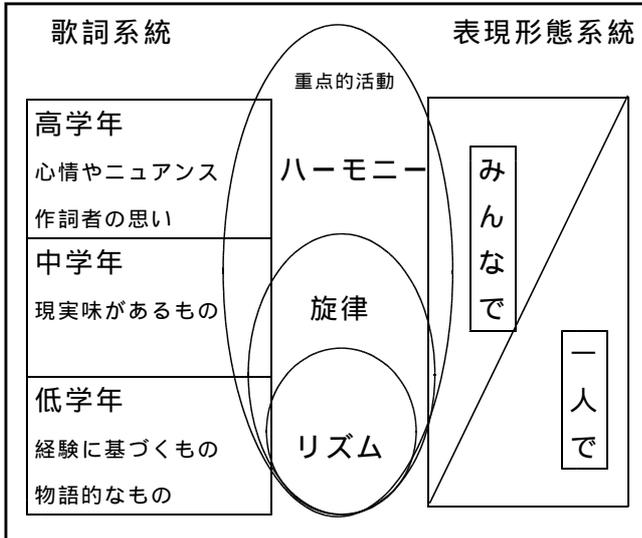
高学年になると、低学年や中学年の頃とは違って、次第に社会性が発達するとともに、ものの見方が客観的になってくる。学習活動においては、音楽の美しさを豊かに感受したり表現したりする意欲が高まり、興味のある音楽や未知の音楽に対しても積極的にかかわろうとする気持ちが高まってくる。そこで、曲想に応じた楽器の選択やよりよい音色の追究、斉唱から合唱へ、または小アンサンブルから合奏へというように多様な表現を楽しむ活動を通して子どもたちが主体的に音楽にかかわることができるようになる。

歌詞における系統性

低学年で歌われる歌詞の内容は、自分の経験に基づいて分かりやすいものや、物語的なものが多い。例えば、「新さぬきのわらべうた」(国民文化祭香川より)という歌は「うちんくのじいちゃん よういうん」「どうにもじょんならん」などの身近で使われている方言が歌詞となっており、実際の話し言葉のように楽しんで歌っている。さらに、教科書教材である「も

りのくまさん」(馬場祥弘訳詞)は、森の中で熊と出会う女の子の物語を楽しく役になりきって交互唱で歌うことができるものである。

次に、中学年で歌われるものには、歌詞内容に現実味を帯びてくるものが多い。いわゆる事実に基づいて情景を思い浮かべる歌詞が多く使われている。例えば、4年生文部省唱歌である「もみじ」(高野辰之作詞)は、真っ赤に色付いた紅葉や秋の山の美しさを歌ったものであり、子どもたちが、今までに見たことのある情景と重ねて、気持ちを込めて歌いやすいと考える。



また、高学年になると作詞者の思いや、歌詞から伝わる心情、その奥にあるものなどを感じ取って歌唱表現に生かす活動が大切になってくる。高学年の子どもたちが大好きな「スマイルアゲイン」(中山真理作詞)の歌詞「明日になって 空が晴れたら 自分を好きになってまた歩き始めようよ」では、実際に晴れた空を思い浮かべるのではなく、その奥に潜んでいる前向きな気持ちを歌詞から読み取って、曲の盛り上がりへと表現を工夫していくことができる。

(3) 音楽的要素を生み出し、転移・活用する教材配列

例えば、低学年の「つくって表現」の学習において、子どもたちが遊びの中で経験してきたリズム遊びやふし遊びの様々な活動やおもしろさを通して、「拍の流れ」という音楽的要素に着目しながら、4拍に当てはめてリズム表現の仕方を学んだ子どもたちが、いろいろなパターンの拍子においても、リズム遊びをしたり楽器を加えて表現したりといった転移・活用することができるのである。

また、学年が進むにつれ、重点を置いた活動が高まってくるとともに、着目すべき音楽的要素も様々な観点が変わり、子どもたちのより豊かな表現へとつながるであろう。さらに、1人で表現する楽しさから、2人や3人で合わせること(アンサンブル)を通して、そのよさに気付いたり、音の重なり的美しさを感じ取ったりしながら仲間と音楽を創意工夫する活動へと広がっていく教材配列を心掛けなければならない。

3 「思考力」を育成する学習指導の実際

4年生 単元 - 「5音のひびきを楽しもうー民謡やわらべうた」-

教材 「ソーランぶし」「^{たんちやめ}谷茶前ぶし」「ひらいたひらいた」

【育成したい「思考力」】

民謡やわらべうたの特徴を生かしたふしづくりの仕方を工夫したり、イメージと表現方法を関連させたりすることができる。

(1) 教材開発について

本単元では、子どもたちが親しみやすい民謡として教科書教材の「ソーランぶし」と、既習のわらべうた「ひらいたひらいた」を取り上げ、民謡のリズミカルな雰囲気やわらべうたのや

さしいイメージを、自ら5音を使ってふしづくりに取り組み、さらにいろいろな楽器の響きやその組み合わせを楽しみながら、音による表現の幅を広げる活動を行う。また、今回は「レミソラシ」の陽音階に加えて、独自の音楽のある沖縄音階「ドミファソシ」にも目を向け、北と南のそれぞれの地方に合った囃子ことばを交えて、ふしづくりを展開していく。

最近テレビやCDでよく耳にする沖縄の音楽は、子どもたちも親しみやすく、楽しんで活動ができる教材である。そこで、陽音階とは違った構成音階を感じ取り、同じ5音からなるという驚きとともに「自分たちもつくってみたい」と意欲的にふしづくりに取り組める題材を設定した。また、一人の表現にとどまらず、友達とふしをつなげたり重ねたりして、グループ表現のよさを味わうことができる教材である。

(2) 単元の流れ

単元計画 (総時数 7 時間)

<p>いろいろな5音階を知ろう (2時間)</p> <p>○「ソーランぶし」「ひらいたひらいた」を歌い、それぞれの構成音を考える。</p> <p>○「たんちゃめぶし」を聴いて、沖縄音階の特徴を知る。</p> <p>・同じレミソラシを使っても、民謡とわらべうたは違った感じがするよ。</p> <p>・沖縄の音階もドミファソシの5音からなっているなんて知らなかった。</p>	<p>展開の工夫</p>						
<p>5音を使ってふしづくりをしよう (4時間)</p> <p>○自分の興味のある音階を選び、ふしづくりをする。</p> <table border="1" data-bbox="220 1093 997 1384"> <thead> <tr> <th data-bbox="220 1093 603 1137">陽音階</th> <th data-bbox="603 1093 997 1137">沖縄音階</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td data-bbox="220 1137 268 1249">民謡</td> <td data-bbox="268 1137 997 1249"> <p>・お祭りや、踊りのイメージで、太鼓を使って表現したいな。</p> <p>・お囃子を元気に入れてみよう。</p> </td> </tr> <tr> <td data-bbox="220 1249 268 1384">わらべうた</td> <td data-bbox="268 1249 997 1384"> <p>・「ひらいたひらいた」の歌詞に合わせてふしを当てはめよう。</p> <p>・曲の盛り上がるころは高い音を使って表現しよう。</p> </td> </tr> </tbody> </table> <p>民謡グループとわらべうたグループに分かれて聴き合う活動を通して、お互いの工夫点やよい点を見つけ、自分たちの活動を振り返る。</p> <p>それぞれの特徴に合ったふしづくりやリズムづくり、また楽器選びをして、友達と音を聴き合って演奏することができる。</p>	陽音階	沖縄音階	民謡	<p>・お祭りや、踊りのイメージで、太鼓を使って表現したいな。</p> <p>・お囃子を元気に入れてみよう。</p>	わらべうた	<p>・「ひらいたひらいた」の歌詞に合わせてふしを当てはめよう。</p> <p>・曲の盛り上がるころは高い音を使って表現しよう。</p>	<p>それぞれの構成音階を書きこませたり、使われている楽器を確認したりすることで、陽音階と沖縄音階の特徴に気付かせる。また、民謡とわらべうたの違いについても速度や伴奏楽器などを通して比較させる。</p> <p>既習のお祭りの太鼓のリズムアンサンブルと、民謡のリズムづくりを結び付けることで、お祭りや踊りをイメージした表現の仕方を工夫させる。</p> <p>民謡やわらべうたといったジャンルは同じでも、構成音階が違うことや表現の工夫を通して、それぞれの曲がもつイメージは変わること気付かせる。</p>
陽音階	沖縄音階						
民謡	<p>・お祭りや、踊りのイメージで、太鼓を使って表現したいな。</p> <p>・お囃子を元気に入れてみよう。</p>						
わらべうた	<p>・「ひらいたひらいた」の歌詞に合わせてふしを当てはめよう。</p> <p>・曲の盛り上がるころは高い音を使って表現しよう。</p>						
<p>「5音のふし発表会」をしよう (1時間)</p> <p>○それぞれのグループがつくったふしを聴き合い、よかったところや工夫した点について話し合う。</p> <p>・お囃子を入れると、リズムカルにきこえるよ。</p> <p>・「ひらいたひらいた」が全く違う歌になったね。</p> <p>・三線が入ると沖縄の音楽らしくなるなあ。</p>	<p>お互いに工夫してつくったふしやリズムを聴き合うことで、そのよさや美しさを味わわせる。また、さらに自分のグループに取り入れることのできる表現を見付けさせる。</p>						

(3) 学習レベルでの支援と評価

【経験との結び付き】

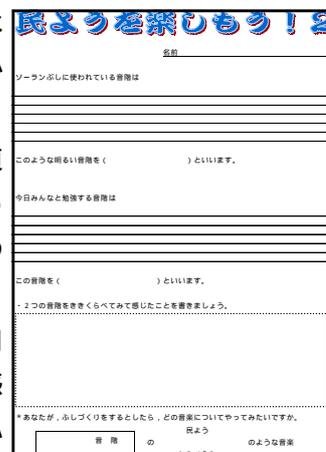
既習の陰音階だけでなく、その他の5音音階（陽音階や沖縄音階）に出合わせることで、これまでの日本のふしに対する概念を砕く。（第1次 1/2, 第2次 3/4）

子どもたちは、共通教材の「さくらさくら」を学習する際、「日本のふしは、ドミファラシの5音音階からなる」ということを構成音から確認し、実際に8小節のふしづくりをしている。

そこで、「ソーランぶし」を歌った時も子どもたちは楽譜に北海道の民謡と書かれていることから「この曲は日本のふしだね。」という意識をもつことができた。しかし教師が既習の「さくらさくら」との比較を促すと、「同じ日本のふしでも違った感じがするのはなぜだろう？」という疑問をもった。これまでの経験を掘り起こしたり、2曲の感じの違い（曲想）を比較したりすることで、どこかもの悲しい感じのする陰音階と、明るい感じのする陽音階を見付け出し、日本のふしの特徴に対する概念を広げていくことができた。

さらに、独自の音楽をもつ沖縄のふしにも目を向けさせ、「谷茶前ぶし」「ていんさぐぬ花」をはじめ、いくつかの沖縄民謡を聴かせるよう支援した。子どもたちは「曲名は分からないが、どこかテレビで聴いたような音楽」「沖縄に行った時に流れていた音楽とよく似ている」という生活経験の結び付きから沖縄の曲だというように推測することができた。

その際に、教師が大切にしたい支援としては、「同じ日本のふしである沖縄の曲だから、陽音階のように5音からできているのではないだろうか？」という仮説を立てることで、子どもたちが音楽的要素へ着目しやすくさせたのである。



【思考様式の意識付け】

民謡と既習のわらべうたのリズムや速さなどの音楽的要素に着目させることで、それぞれの曲想の違いを感じ取ることができるようにする。

同じ陽音階でも、民謡とは違った感じのするわらべうた「ひらいたひらいた」を聴き比べさせた。子どもたちは「わらべうたの方がのんびりとしている。」「民謡の方がにぎやかだ。」という意見が多く、速度、音色（声色）、リズムなどの音楽的要素に目を付け、リズムカルな民謡に比べてわらべうたの、のんびりとした素朴さを感じ取ることができた。そこで、ワークシートにこれらのふしの違いやリズムの違いなどをまとめることで、子どもが陽音階と沖縄音階、また民謡とわらべうたを両方の視点から比較しやすくした。

そして、本単元では、つくってみたいふしとして子どもたちが興味のある音階（陽音階と沖縄音階）及び、にぎやかな「民謡」か素朴な「わらべうた」かを選択させ、それらのグループごとに、イメージに合ったふしづくりを展開していく。ワークシートや表に立ち返らせることで、子どもたちのもつイメージとともにそれぞれの構成音や特徴となるリズムや速度を常に意識させるようにした。



【思考様式の意識付け】

子どもがイメージした沖縄音階（陽音階）の民謡やわらべうたは、ただ単に音を並べてつくるとい活動だけにとどまらず、それぞれの特徴を生かしたリズムや速度、楽器の音色やそれに合う囃子言葉など音楽的要素に着目させることで、イメージしたものを歌や楽器を使って表出させる。

そして、自分たちでつくったふしが、民謡やわらべうたに合っているかどうか、その妥当性をグループ発表を通して集団吟味し合う場を設け、よりよい表現へ向かって創意工夫させる。
(第2次 3/4)

子どもが言う「なんとなく沖縄っぽい」という言葉はどこから来るのだろうか。最も重要となる要素はまず構成音階の違いである。西洋音楽と違い、日本のふしは5音を使って曲を構成する特徴がある。これらの音階を使えば、陽音階や沖縄音階のふしは容易につくることができるだろう。しかし、それらの音をただ機械的に並べてみただけでは自分たちのイメージする音楽にはならない。そこで、5音音階を手段として、楽しい民謡をつくるグループと、子どもたちが遊べるようなわらべうたをつくる活動をさせる支援をした。

まず、民謡グループにはなくてはならない打楽器だが、それぞれの地方に合ったリズムや囃子言葉をCDを聴きながら試行錯誤させた。すると、陽音階的民謡グループは「ソーレ」「ハイハイ」といった言葉や「ドンカカ」などの太鼓のリズムを考え始めた。沖縄民謡グループは、「ハイヤ イヤサッサ」のリズミカルな言葉に「タッカ」のリズムをワークシートに書き込んでいった。また、



わらべうたグループは、「ひらいたひらいた」の歌詞を使ってオリジナルなふしを考え、それぞれの違った音階で表現させることで、5音のもつ響きの違いやおもしろさを味わわせた。

自分たちのイメージした音楽が妥当性のあるものかどうか、民謡グループとわらべうたグループ同士で聴き合う活動を通して、それぞれの音楽的要素の工夫を見付け合い言語化へと結び付ける。そして、さらによりよい表現へと創意工夫する活動を支援することで、自己のイメージだけに偏らず、より客観性のある思考へと高めることができる考えた。その際に、2色の付箋詞を用意し、工夫点とアドバイスする点をお互いに書き込ませることで他グループの工夫した表現やよさに気付かせるとともに、自分たちの表現に生かせるものはないか吟味させた。



評価に当たっては、本時のワークシートや発表などの表現内容を基に、各自のグループの到達目標を観点に振り返らせた。また、他グループ演奏を聴いて、工夫点を見付け合った後、自分たちの演奏に取り入れることのできるものはないか、感じたことを形成的に評価した。

【評価】 方法 ワークシートに書かれた気付きや発言

B：音楽的要素の一つ観点に入れて感想を書くことができる。【感受】

例：「リズムが沖なわの感じがした。」「〇〇の楽器の音色がよかった。」等

A：Bに加え、全体的な音楽の流れについて気付き、自分たちの演奏に取り入れることができる。

例：「沖縄のふしに、太鼓のタッカのリズムがとても合っていた。」「歌い方がのびのびとして、子どもが遊ぶわらべうたの感じがしたので、私たちも歌い方を工夫したい。」等